

臨地実習における看護系大学生のレジリエンス： フォーカスグループインタビューによる分析

The Resilience of Undergraduate Nursing Students in Clinical Practicum:
Analysis by Focus Group Interviews

隅田 千絵¹⁾

CHIE SUMIDA¹⁾

要 旨

目的：看護学生が臨地実習で遭遇する困難をどのように乗り越えているのか，学生のレジリエンスを質的に明らかにする。

方法：看護系大学4校に在籍する4年次生27名を対象に，1大学につき6～8名のグループを形成し，フォーカスグループインタビューを行い，得られたデータを質的帰納的に分析した。

結果：臨地実習において学生は，【支援してくれる人がいる】とその存在を認識し，【進んで問題解決行動をとろうとしている】ことが導き出された。また，【目標を持っている】ことや，【やり遂げる自信がある】ということが，困難さを乗り越え，そこから学び，その状況に応じた適応的な行動をとれる力として導き出された。

結論：学生は，自分の支援者の存在を認識し，進んで問題解決行動をとろうとしていた。また目標を持っていることや，実習をやり遂げる自信を持つことが導き出された。

キーワード：レジリエンス，看護学生，臨地実習

I. はじめに

現在の看護基礎教育では，平成20年度のカリキュラム改正において，看護基礎教育内容の充実と実践能力の強化に焦点があてられ¹⁾，カリキュラム改訂後の評価と教育内容のさらなる充実を図るとし²⁾，看護教育の内容と方法に関する検討会報告書³⁾では，学生の看護実践能力を明確化するとともに，横断的な学習方法の提案や新たに卒業時到達目標を作成するなど，教育内容の質に重点がおかれている。これは，看護基礎教育で習得する技術と臨床現場で求められるものに乖離があること，在院日数の短縮や患者の権利の擁護などの観点から，臨地実習で学生が経験できる範囲や機会が狭くなっていること，また就職後も自信が持

てない不安の中で業務を行わざるをえなくなり，リアリティショックを受け早期離職へとつながること¹⁾などが要因とされるなかで，臨地実習においてもこれまで以上に充実した学びが求められているといえる。

臨地実習を看護学の学習過程の一つとして捉えるとき，その過程は教員と指導者そして患者や実習グループメンバーなど，学生に関わるすべての人とともに展開されていく。そのため，それらの人々との充実した関わりや，成し遂げたというポジティブな体験が，実践教育の場でのよりよい学びにつながるものと推察される。

このようなポジティブさに関連する心理特性の一つに，レジリエンスがあげられる。レジリエン

¹⁾ 四條畷学園大学看護学部

¹⁾ Shijonawate gakuen University School of nursing

スとは Rutter⁴⁾によって提唱された概念で、同質のストレスフルな生活を経験しても、心理的・社会的に不適応な症状を示すものもいれば精神的健康を維持するものも存在するという個人差に注目したものである。石井⁵⁾によると、レジリエンスは心理的ストレス反応の低減を目的とするストレスコーピングと違い、適応状態に至った結果を重視したもので、ストレスに対する柔軟性を示した概念だと述べられている。看護においてレジリエンスが用いられるようになったのは、1990年代後半の欧米であり、我が国においては、2000年代から研究が行われるようになった。その研究対象は患者や家族にはじまり、近年では看護師に及んでいる。先行研究によると、ストレス反応が生起し進化するプロセスを辿るなかで、レジリエンスはどの段階であっても心理的ストレス反応の低減効果を有する可能性があり⁶⁾、ストレスフルな状況を克服した後では、自己効力感をも向上することが示唆されている⁷⁾。

看護学実習終了後に学生のレジリエンスが上昇することを明らかにした研究がいくつかあるが⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾、学生のレジリエンスが実習後に上昇することは、臨地実習がストレスフルな状況にあることを示すとともに、そのストレスフルな状況に学生のレジリエンスが働きかけ、回復する力になっていると考えることができる¹¹⁾。上淵¹²⁾によると、レジリエンスは「意欲」や「やる気」といった人間の積極的な側面に着目したものであり、学習活動を生起させ方向づけていくことに関連する、いわば学習意欲の向上に関連した学習方略の一つであるといえる。先行研究¹³⁾では、臨地実習における学生のレジリエンスの構成要素として、【信頼する他者から学生が受ける支援】、【学生の内面的な強み】、【学生が主体的に実行できること】の3つが導き出されており、この結果を受けて、指導にかかわる教員や指導者が学生の実習環境を理解することや、どのようなレジリエンスが機能しているのかを把握する必要性が示唆されている。しかしながら、困難な出来事に対する個人のとらえ方の違いや、時間的経過に伴う想起の困難さなどが課題として残されたと報告されている。そこで、学生の臨地実習におけるレジリエンスを明らかにする方法として、対象者の「なまの声」を直接反映し、

相互作用によって意見の引き出しができ、個別インタビューに比べプレッシャーが少ない¹⁴⁾、フォーカスグループインタビュー（以下、Focus Group Interview：FGI）を採用し、学生の率直な思いを引き出しやすくし、記憶の抜け落ちを補填した、汎用性のあるデータを得たいと考えた。以上を踏まえ、本研究では学生が臨地実習で遭遇する困難に着眼し、学生のレジリエンスを質的に明らかにする。学生のレジリエンスを明らかにすることができれば、学生の抱える脆弱性に対して教員や指導者が働きかけを行うことができ、高めることへとつながり、適応的に課題を遂行するという点において、学習活動を効果的に支援できると推察される。

II. 研究目的

本研究の目的は、看護学生が臨地実習で遭遇する困難をどのように乗り越えているのか、学生のレジリエンスを質的に明らかにすることである。

III. 用語の定義

レジリエンス：レジリエンスの概念分析¹¹⁾を踏まえ、本研究では「臨地実習で困難な出来事に遭遇しても、それを乗り越え、そこから学び、その状況に応じた適応的な行動をとれる力」とした。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、臨地実習において看護学生が困難な出来事をどのように乗り越えたかについて明らかにするため、質的帰納的研究デザインを用いた。

2. 研究参加者

研究協力が得られた4つの看護系大学において、多様な実習を経験した4年次生27名を対象とした。なお、学生間の相互作用が得られやすいと考え、1大学につき6～8名の学生グループを形成し、4つのFGIを実施した。

また、参加者の選択基準として、社会経験はレジリエンスに影響を与えるため、①就業経験のないこと（アルバイト経験を除く）、②編入学生でないこと、③婚姻、出産の経験のないことの3点を設けた。

参加者の選定は、各看護系大学の学部長あるいは

は学科長へ研究内容を説明し、研究の承諾を得て学生に周知し、応募のあった学生を対象とした。なお、学生への周知の方法については、大学内掲示板へのちらしの掲示、学生の集合する場での研究者による依頼状の配布・説明、窓口の教員から学生への依頼状の配布の3方法を用い、調査を依頼する大学と相談の上、各大学の意向に沿った1つ、もしくは複数の方法で周知を行った。

3. データ収集方法

インタビューは、「臨地実習における困難な出来事をどのように乗り越えたのか」について、1時間半の時間制限を設け、体験した内容を自由に語ってもらった。平均は、1グループにつき1時間15分程度であった。

なお、インタビューは司会者（研究者）と記録者の2人が同席のうえ、参加者の同意を得て録音を行い、同時に記録ノートに書き留めた。記録の方法としては、安梅¹⁴⁾の手法を参考に、発言者をはじめ、他のメンバーの表情や非言語的コミュニケーションなどについても発言と対応させて記した。

4. データ収集期間

2015年6月～10月

5. データ分析方法

FGIで得られたデータを質的帰納的に分析した。

録音したインタビュー内容と記録ノートを合わせてすべて逐語録に起こし、どの参加者がどんな発言をしたのかがわかるように参加者別に番号を付した。次に本研究でのレジリエンスの定義を踏まえ、話題の場面ごとに研究目的に沿った語りの内容を取り出し、意味のある項目にラインを引き、文脈を解釈した。次に、ラインをつけた項目を内容が変わらないように要約し番号を付しコード化を行った。そして、コードを比較し、類似するものを集めてサブカテゴリーとした。また、サブカテゴリー間の関係性を類似性と相違性によって検討し、抽象度を上げカテゴリーとした。分析結果は抽出内容に偏りがないように、各大学の参加者全員へメンバーチェックを依頼し、意見を募り同意を得た。すべての分析過程において、看護学教育の経験をもつ研究者間で検討を繰り返し、妥当性を高めた。

なお、記録ノートには、言語的・非言語的コミュニケーションをありのまま逐次記録しており、語

りの内容を補完的に説明するために活用した。

6. 倫理的配慮

研究者の所属大学ではない看護系大学に研究協力を依頼し、学部長あるいは学科長より承諾を得た。応募のあった学生と連絡を取り、調査日時を調整して決定した。そして、研究への参加は自由意思であることを再度説明し、同意の得られた学生に対して、インタビューを実施した。その際、同意後であっても途中で辞退することができること、インタビューには守秘義務があること、インタビュー中は用意した仮名で呼び合うこと、得られたデータは、個人が特定されないように加工し、データの機密性を保持した上で廃棄することなどを口頭と書面で伝え、書面で同意を得た。なお本研究は、大阪府立大学看護学研究倫理委員会の審査を受け、承認された後に実施した（申請番号26-61）。

V. 結果

調査は4大学で行い、研究参加者の内訳は女性26名、男性1名の計27名の学生であった。参加者は、すべての実習が終了している者が20名、途中の者が7名であった。分析の結果、101のコードから、21のサブカテゴリーと4つのカテゴリーが抽出された（表1）。

カテゴリーを【 】,サブカテゴリーを[],コードを《 》,学生の語りは「 】,語りの中にある会話の部分については『 】,筆者の加筆は()で表記する。

1. 【支援してくれる人がいる】

このカテゴリーは、[信頼している教員がいる],[教員には安心して自分の考えを伝えることができる],[私を承認している看護師がいる],[看護師へ相談することができる],[家族へ協力を依頼できる],[家族の存在に支えられている],[支え合えるグループメンバーがいる],[相談できる先輩がいる],[支え合える友人がいる],[患者に支えられている]の10のサブカテゴリーから構成された。これは学生が自分を支える人の存在について語られた内容から導き出された。

[信頼している教員がいる]の語りでは、「先生からの指導をいただいて、しっかり自分で内容を整理した上で発表する、指導者さんに伝えるって

表 1. 臨地実習における看護学生のレジリエンス

カテゴリー	サブカテゴリー
支援してくれる人がいる	信頼している教員がいる 教員には安心して自分の考えを伝えることができる 私を承認している看護師がいる 看護師へ相談することができる 家族へ協力を依頼できる 家族の存在に支えられている 支え合えるグループメンバーがいる 相談できる先輩がいる 支え合える友人がいる 患者に支えられている
進んで問題解決行動をとろうとしている	進んで友人と情報の共有を図ろうとする わからないことは積極的に質問する 自己学習をして臨んでいる ストレスを貯めないように睡眠に気を配る
目標を持っている	看護という職業に興味がある ロールモデルの看護師がいる
やり遂げる自信がある	意欲を持っている 普段よりも感情をコントロールできる 行動を変容することができる 辛くても耐えることができる 記録の空欄が少なくなるとやれると思う

いうことに重きを置いてやらせていただいたので、3週間の実習を乗り越えることができました」のように、教員の指導の結果、報告内容を吟味し指導者へ伝えられたことが語られ、複数の学生からも頷くなどの同意を示す態度がみられた。

「教員には安心して自分の考えを伝えることができる」の語りでは、「見方によって、私が看護師に向いてないのかなと考えて、先生と面談する機会に、『自分の性格をこう分析しているんですけどそう見える理由を教えてくださいませんか？』って聞きました。そこで教えてもらったことをしっかり受け止めて、頑張ろうと思いました」というように、周りからの評価について悩んだ際に自分の考えを安心して話せる教員がいることについて語られていた。

「私を承認している看護師がいる」の語りでは、「看護師さんたちも忙しいのに、私たち（学生）の

ことも、『一緒にその患者さんを見るメンバー、（同じ）チームなのよ』って看護師さんからフィードバックをもらいました」という発言があり、同席していた学生すべてからの同意の姿勢が得られた。この様子から、初学者である学生をケアチームの一員として受け入れる発言や姿勢が学生の心に強く残っていることがうかがえた。

「看護師へ相談することができる」という語りでは、「病棟の看護師さんがすごく親身になって話を聞いてくださる方で、毎日患者さんのことだけでなく、私の話も聞いてご指導をいただきました。そうやって毎日話聞いてもらったから何とか2週間乗り越えることができたと思っています」と、精神的に支えとなる看護師の存在について語られていた。

「家族へ協力を依頼できる」という語りでは、「5時には起きないといけないことを電話で家族に話

したら、お父さんが毎朝『おきてるか?』って電話をくれていました」と、家族の協力を示す内容が語られており、複数の学生が笑顔で頷き、同意を示す態度が見られた。

[家族の存在に支えられている]の語りでは、「(お父さん、お母さんが)『お姉ちゃん頑張っているから、今日はちょっとみんなで遅くまで起きてよか?』と言ってくれたり、妹が定期的に手紙を書いてくれたり、家族に恵まれているなど思いました」という発言があり、同席していた学生全員が興味のある表情を示し同意していた。これより家族との良好な関係が実習を送るうえで支えとなっていたことが導き出された。

[支え合えるグループメンバーがいる]の語りでは、「私のグループは仲が良く問題もなくて、皆で『今日大変だったね』や、『先生がいなくて、カンファレンス大変だったね』、『今日の実習はこんなことあって、どうだった?大丈夫?』というように、皆で協力し合って、声を掛けながら(実習を)していました」という語りにも数人が笑顔で同意を示し、実習グループの良好な関係によって、円滑なコミュニケーションが図れていたことが導き出された。

[相談できる先輩がいる]という語りでは、「みんなに聞いてもわからなくて、ちょっと泣いてしまって、学校で泣いていたときに、サークルの先輩が通ったんです。同じ看護の先輩だから相談したら、『そんなこと、去年の実習でもいっぱいあるから』って言って、先輩達が勉強している部屋に連れて行ってくれました。何人か(同じような)経験がある先輩がいて、その先輩方から、『そういうときは、こうすればいいよ』って沢山教えてもらいました」と、悩んでいるときに学校の先輩からのアドバイスを受けたことについて複数の学生が同意を示し、このことが実習を乗り越えるきっかけとなっていた様子が語られていた。

[支え合える友人がいる]という語りでは、「色んなことを友だちに話した後で、『答えは出なかったけど、傾聴されることでちょっとでも気持ちが楽にならない?』と言ってくれました。共感とか受容ってというのは、思いを表出することで答えが見えなくても、ちょっと気持ちが楽になるっていうのがそのときに学びました」というように、ケ

ア方法について友人と話し合い、学び合えたことが語られていた。

[患者に支えられている]という語りでは、「患者さんも(学生の状況を)わかってくれて、『がんばってね』って応援してもらって、(実習を)終わることができました」という語りにも他の学生たちは頷いて同意を示しており、患者からの肯定的な言葉かけは、学生の気持ちを支えていることが導き出された。

2. 【進んで問題解決行動をとろうとしている】

このカテゴリーは、[進んで友人と情報の共有を図ろうとする]、[わからないことは積極的に質問する]、[自己学習をして臨んでいる]、[ストレスを貯めないように睡眠に気を配る]の4つのサブカテゴリーから構成された。これは、困難さを乗り越えるために自発的にとっていた問題解決行動の語りから導き出された。

[進んで友人と情報の共有を図ろうとする]という語りでは、「(友人に)『どうだった?』、『どんな疾患が多かった?』とか、『事前準備何をすればいい?』とか聞いたりしました」という語りには複数の学生が同意の態度を示し、学生自ら進んで情報を得て実習を行っていることが導き出された。

[わからないことは積極的に質問する]という語りでは、「最初は声を掛けるのも怖くて、でも、実習しているうちに、自分の患者さんにやりたいこと、それをするためにはやっぱりちゃんと看護師さんとも調整しないと患者さんのためにもできないので、最初は自分が嫌だから聞けなかったけど、患者さんに何かするためにも看護師さんに自分がちゃんと聞かないといけないっていう気持ちの変化はすごくありました」というように、実習を経て積極的に看護師とコミュニケーションを図っている様子が語られていた。

[自己学習をして臨んでいる]という語りでは、「毎日、自宅に帰ってから自己学習をして、2週間乗り越えることができました」や、「もう一回自分で知識や技術をすごく勉強し直して、その実習を行うことができました」というように、実習中に自己学習を行って対応していることが他の学生の同意の様子からも導かれた。

[ストレスを貯めないように睡眠に気を配る]という語りでは、「睡眠時間がないことが一番辛かつ

たです。家も遠かったし、記録の量も多くて、毎日2時間寝られたらいいような日もあって、すごく辛かったです。そこで病棟にいる時に、もう記録を書いちゃおうと思って工夫をしたら、最後には何とか睡眠時間も確保できて、実習が辛いついていう気持ちも何となく減った」というように、自らの体調を管理していることが語られていた。

3. 【目標を持っている】

このカテゴリーは、[看護という職業に興味がある]、[ロールモデルの看護師がいる]という2つのサブカテゴリーから構成された。これは、困難さを乗り越える際に心の拠り所となる目指すものについての語りから導き出された。

[看護という職業に興味がある]という語りでは、「もともと、看護師になりたいと思っていました」、「看護の勉強をしていくうちに、看護の方に魅力を感じました」など、全てのグループの学生が同意を示す態度を見せていた。

[ロールモデルの看護師がいる]という語りでは、「病棟の指導者さんで、患者さんと向き合っていて、しっかり看ている人が多くて。こういう人(看護師)の下で働きたい、とすごく思う機会があった」や、「その看護師さんは、すごく忙しいのに、しんどそうな感じがまったくしませんでした。同僚の看護師にもすごく笑顔で接しているし、患児の親にも寄り添った関わりをしていました。看護師さん同士も笑顔で、あたたかい職場っていうのは初めてでした。だから、そんな看護師さんにどうやったらなれるかわからないんですけど、明るい雰囲気にする事ができる看護師さんになりたいなって思いました」など、実習中に一緒に働きたいと思うような、看護師の存在についての語りでは、しっかりと頷き、微笑む学生の様子が見られた。

4. 【やり遂げる自信がある】

このカテゴリーは、[意欲を持っている]、[普段よりも感情をコントロールできる]、[行動を変容することができる]、[辛くても耐えることができる]、[記録の空欄が少なくなるとやれると思う]の5つのサブカテゴリーから構成された。これは、困難さを乗り越える際の自己の行動への信頼について述べられた語りから導き出された。

[意欲を持っている]という語りでは、「実習って自分で頑張らないと、自分が主体的にならない

と何も学べないですよ。普段よりも実習に対しては積極的に行くようにはしていました。自分のためにも患者のためにも」という発言には同席した学生から同意する表現が見られ、学生が誰のためのケアなのかについて考え行動している様子が語られていた。

[普段よりも感情をコントロールできる]という語りでは、「落ち込んでいる時間はなかったです。落ち込んでいても次の実習がまた(気持ちの)切り替えみたいになっていました。これはこれ、終わった」という発言があり、同席している学生も頷く様子がみられた。また、「自分の勉強の知識不足っていうこともすごく感じましたが、(看護師が)忙しく気持ちの余裕がないときに、きつい指導を受けた経験から考えさせられた実習がありました。そのような場面から、自分の心にゆとりを持たなければならないってことを学ぶことができ、心がけました」など、一つの実習を終えると次の実習に向けて気持ちを立て直している様子が語られていた。

[行動を変容することができる]という語りでは、「自分は(質問)したいけど、看護師さんが怖くて聞けずに、どうしようと思ったので先生に相談しました。(先生から)『そうやって怖いって一方的に思わずにもうちょっと自分も一回変わって見たら?』って助言をいただいたので、見方を変えて頑張ってみました。どうやって乗り越えたかという、そうやって怖い人と決めつけていかずに、自分から変わっていきこうと積極的に質問をするようにしました」というように、学生自身が対応を変えたことについても複数の学生が笑顔になり頷き同意を示す様子が見られた。

[辛くても耐えることができる]という語りでは、「3年の実習で、初めて術後の患者さんを受け持った時に、血圧測定を忘れてしまって、病室出た後に(看護師に)『さきほど、血圧測定を忘れちゃった』って言いに行ったのですが、『血圧測定を忘れて何が術後観察なの?』って言われてしまいました。確かに思って思ったのですが、(謝ったら)『ごめんなさいって何よ!』って言われました。(看護師が)ゴミ入れのふたを“バーン!”って何回も往復するくらいの勢いで叩いているのを目の前で見ていたそのとき、なんか“嵐だ!”と思って、目の前

は嵐だから黙っていたら過ぎ去るって思って、それで乗り越えました」と、気持ちを立て直しながら実習を行っている様子が語られていた。

〔記録の空欄が少なくなるとやれると思う〕という語りでは、「ポートフォリオの〈援助を実施した〉の欄で、(記録が空欄になっている)〈社会的背景〉や〈技術〉を見ながら、今日はこういうことしたけど何が足りていなかったのか、どういうところで失敗していたかって確かめることで、以前よりできるようになっているところや、できていないところが分かってきました」という語りではほとんどの学生が同意を示し、目に見える成果が学生の気持ちの維持に関連していることが導かれた。

VI. 考察

本研究において、臨地実習における学生のレジリエンスの新たな視点として、支援を受ける学生の認識や自律的な行動、具体的な目標を持っていることや自分に対して自信を持って実習に取り組んでいることがFGIから導き出された。

また、先行研究¹³⁾とは異なり4つのカテゴリで構成されており、4つのカテゴリのうち次に述べる2カテゴリが異なる内容として抽出された。【進んで問題解決行動をとろうとしている】というカテゴリの中では、〔進んで友人と情報共有を測ろうとする〕という自発的な問題解決行動が、【やり遂げる自信がある】というカテゴリでは、〔行動を変容することができる〕、〔辛くても耐えることができる〕、〔記録の空欄が少なくなるとやれると思う〕という自信をもって実習へ取り組む姿勢についての語りから得られた。これらの語りは、FGIによって実習場面が想起されやすくなり、学生間の相互作用により抽出されたものであると考える。

Grotberg¹⁵⁾によると、レジリエンスの構成要素には、他者からの支援や安定したコミュニティ、手本となる人の存在などが、「私には外的支援がある (I have external support)」として述べられている。本研究においては、学生の語りから、【支援してくれる人がいる】と受け止めており、支援があることと同時に、「外的な支援」と学生が認識していることが重要であることが導き出された。同様に、井俣ら¹⁶⁾も資源の認知と活用を考慮したレ

ジリエンス尺度開発の中で、持っている資源を認知し、それを活用することが重要であると述べている。すでに支援が用意されているにもかかわらず、受け手である学生がそれに気づき、活用しなくては、困難さを乗り越える際の手段となりえないといえる。支援を受けるということは、他者から手をさし伸ばされることをただ待つことではなく、支援を得ていると認識した上で享受するものといえる。支援について、南ら¹⁷⁾は「特定個人が、特定の時点で、彼/彼女と関係を有している他者から得ている、有形/無形の諸種の援助」と定義しているが、支援を受ける側がそれを認識した上で活用しているということが学生の語りから導き出された。

また、学生が実習中に支援を受けたと考えている相手には、教員や看護師そして実習グループのメンバーが多く、次いで友人や家族、先輩などが語られていた。このような人々は、学生が実習期間中に困難さを共有する時間が多いと推察される。看護学実習は、学生・指導者・患者の3者の関係を中心に、それぞれにほかの医療従事者、家族、他の学生が複雑に関係しあうことを必然とする授業である¹⁸⁾といわれているが、学生を取り巻くこのような環境が、学生にとって居心地のよい安心できるものでなくては、支援を受けたと認識できるものにはなりえないといえる。

次に、学生は自律して【進んで問題解決行動をとろうとしている】ように、自己決定理論においては、コンピテンスへの欲求、自律性への欲求、関係性への欲求の三つの心理的欲求が満たされると、人は意欲的になり、パーソナリティが統合的に発達するとされている¹⁹⁾。コンピテンスの欲求というのは、環境とかわりながら成長を指向する生来的な欲求を示し、関係性への欲求とは、他者やコミュニティとかわろうとする傾向性を示す²⁰⁾。自律性への欲求とは、誰かの指示に従うのではなく、自ら決定したり行動を起こしたり、言動に責任を持ちたいという欲求のことを示す。自律的であるということは、単に他者からの自立を確保しているとか、権威に従属しないというだけでなく、強い自我をつくりあげ、状況を自らのものとして受け止め、自己をコントロールしながら状況に対処しているようなパーソナル特性とみる

ことができる²¹⁾。学生の語りからは、実習で生じた困難な状況を自分のものとして受け止めたうえで、問題解決に対処していこうとする自律的な姿勢をうかがうことができ、困難な出来事を乗り越える学生は、そのような自律的な行動をとる傾向にあることが導き出された。

一方、学生は将来に対する【目標を持っている】ことが導き出されたが、鹿毛²²⁾によると、行為が起こり、活性化され、維持され、方向づけられ終結する現象として動機づけがあると述べられている。つまり、なぜどのように行為が起こるのか、ということの中核とし、量的な側面と質的な側面の二つのプロセスから考えていかなければならないといえる。例えば学生が実習で生じた課題に対して、様々な文献を用いて取り組むその行為は、動機づけの量的側面であり、実習期間を通して課題に取り組むという姿勢は、動機づけの質的な部分であるといえる。しかしながら、なぜ、どのようにしてその行為が起こっているのかの問いについて考える必要があり、またそれは、個人内要因と個人外要因についても考える必要がある。個人内要因に含まれる感情は、学習意欲と関連があるため²⁰⁾、将来に対し具体的な目標を持っている学生は、実習での学習活動において前向きに取り組むものと考えられる。

そして、学生は困難な出来事に際しての乗り越え方について、【やり遂げる自信がある】と述べていたが、Bandura²³⁾によると、自分の能力が高いと信じる学生が、自分の能力が低いと感じる学生より、成績が高くあろうと持続的な努力をし、実際に成績が高いことを研究で明らかにしている。本研究において【進んで問題解決行動をとろうとしている】学生は、実習に対し意欲を持って取り組み、困難さを乗り越えるために行動変容を行うなどの努力をしていた。その結果、自己が変容することで高揚感を感じるなど、フロー状態に類似した感覚を述べている学生もいた。これは、Csikszentmihalyi²⁴⁾によると自己充足的な活動、つまりフローにより、生活の流れを異なったレベルへと引き上げる行為、すなわち学生が困難さを乗り越える際にその行為がもたらす充足感ととらえることができる。

また【やり遂げる自信がある】という学生の特性は、一連の行動を効果的に遂行できるかという観点からみた自分の実行能力に関する主観的な判断である効力期待²⁰⁾の考えと類似すると考えられる。つまり、実習における学生の効力期待とは、学習について効果的に取り組むことができることや、自分の取るべき行為についての自信、見通しに対する前向きな思考などが当てはまると考えられる。このように学生の語りからは、いずれも実習に対する前向きな姿勢や思考が反映されており、自己に対する効力期待を持つ傾向にあることが導き出された。

本研究結果を踏まえ、4つの視点から学生を俯瞰し、レジリエンスの脆弱な部分への介入が必要であることが示唆された。これらから教員や指導者は、学生が支援者の存在を認識できるような目に見える支援と、学生の個別性を考慮し、自律に向けたファシリテーションを行うことが重要である。これらを行うことが、学生の目標や自信を形成・促進し、レジリエンスに働きかけることへとつながるといえる。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、看護師コースを履修している学生だけでなく助産コースを履修している学生や保健師や養護教諭コースを履修している学生など、参加者の実習履修状況にばらつきがあったことがあげられる。今後の課題として、本研究結果が履修条件の違いによって相違がないか、検討していく必要がある。

VIII. 結論

本研究では、学生が臨地実習で遭遇する困難をどのように乗り越えているのか、看護学生のレジリエンスを質的に明らかにするためにFGIを行った。その結果、【支援してくれる人がいる】と自分の支援者の存在を認識し、自律して【進んで問題解決行動をとろうとしている】。また、物事を成し遂げる際に必要な動機づけとなる将来への【目標を持っている】ことや、【やり遂げる自信がある】という、自己に対する効力期待を持っていることが導き出された。

文献

- 1) 厚生労働省 (2007) : 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, 2017.11.9, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>.
- 2) 厚生労働省 (2009) : 看護の質の向上と確保に関する検討会中間とりまとめ, 2017.11.9, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/03/dl/s0317-6a.pdf>.
- 3) 厚生労働省 (2011) : 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書, 2017.11.9, <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf>.
- 4) Rutter, M. (1990) : Psychosocial resilience and protective mechanisms. In J.Rolf, A. S. Masten, D. Cicchetti, K. H. Nuechterlein & S. Weinteraub, (Eds.), *Resilience and Protective Factors in the Development of Psychopathology*, 181-214, New York: Cambridge University Press.
- 5) 石井京子 (2009) : レジリエンスの定義と研究動向, *看護研究*, 42, 3-14.
- 6) 村田尚恵, 分島るり子, 古島智恵他 (2012) 基礎看護実習終了後の看護学生の精神的回復力と臨地実習自己効力感の関連, *医学と生物*, 156 (2), 47-52.
- 7) Taylor, H. & Reyes, H. (2012) : Self-Efficacy and Resilience in Baccalaureate Nursing Students, *International Journal of Nursing Education Scholarship*, 9 (1), 1-13.
- 8) 山岸明子, 寺岡三左子, 吉武幸恵 (2010) : 看護援助実習の受け止め方と resilience (精神的回復力) 及び自尊心との関連, *医療看護研究*, 6 (1), 1-10.
- 9) 川上あずさ, 近藤裕子, 藤岡敦子他 (2011) : 看護学生のレジリエンスの変化—基礎看護学実習 2 前後の比較から—, *日本看護科学学会学術集会講演集*, 474.
- 10) 小林久子, 松井幸子, 渡邊清江他 (2012) : 成人看護学急性期実習における看護学生のレジリエンスに関する研究. *国際ナショナル Nursing Care Research*, 12 (1), 95-103.
- 11) 隅田千絵 (2016) : 看護学実習における学生のレジリエンスについての概念分析, *日本医学看護学教育学会誌*, 25 (1), 15-21.
- 12) 上淵寿 (2012) : Chapter8 動機づけと健康, *動機づけ心理学*, 158-171, 金子書房, 東京.
- 13) 隅田千絵, 細田泰子, 星和美 (2013) : 看護系大学生の臨地実習におけるレジリエンスの構成要素, *日本看護研究学会雑誌*, 36 (2), 59-67.
- 14) 安梅勅江 (2001) : ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法, *科学的根拠に基づく質的研究方法の展開*, 医歯薬出版, 東京.
- 15) Grotberg, E. H. (1999) : *Tapping Your Inner Strength, How to find the Resilience to deal with Anything*, 1-3, Oakland, CA: New Harbinger Publications.
- 16) 井隼経子, 中村知靖 (2008) : 資源の認知と活用を考慮した Resilience の 4 側面を測定する 4 つの尺度, *パーソナリティ研究*, 17, (1), 39-49.
- 17) 南隆男, 稲葉昭英, 浦光博 (1988) : ソーシャルサポート研究の活性化に向けて—若干の資料—, *哲学*, 85, 151-184.
- 18) 杉森みどり, 舟島なをみ (2016) : 看護教育学第 6 版, 医学書院, 東京.
- 19) Deci, E. L. & Ryan, R. M. (2002) : *Handbook of Self-Determination Research*, 3-8, Rochester: University of Rochester Press.
- 20) 鹿毛雅治 (2010) : 学習にかかわる感情と動機づけ, 三宮真智子編, *教育心理学*, 54-69, 学文社, 東京.
- 21) 松田惺 (1990) : 「自律性」, 細谷俊夫, 奥田真丈, 河野重男他編, *新教育学新辞典* (4), 230-231, 第一法規出版, 東京.
- 22) 鹿毛雅治 (2013) : 学習意欲の理論, 金子書房, 東京.
- 23) Bandura, A. (1995) / 本明寛, 野口京子 (1997) : 激動社会の中の自己効力, 金子書房, 東京.
- 24) Csikszentmihalyi, M. (1990) / 今村浩明 (1996) : フロー体験喜びの現象学, 世界思想社, 京都.

Abstract

Objective: This study aims to qualitatively reveal the resilience of undergraduate nursing students and the means by which students overcome difficulties in clinical practicum.

Method: The participants were 27 fourth-year students enrolled at four nursing universities. We conducted focus group interviews with groups of 6 to 8 individuals at each university. The data obtained was then quantitatively and inductively analyzed.

Results: Students in clinical practicum were aware that [I have individuals who support me], and the statement [I am proactively trying to solve problems] was derived. Further, [I have goals] and [I have the confidence to follow through] were derived as abilities for overcoming difficulties, learning from them, and behaving according to the situation.

Conclusion: Students are aware of the existence of their supporters and are proactively trying to solve problems. It was also derived that they had goals and had confidence to complete the clinical practicum.

Keywords : resilience, undergraduate nursing student, clinical practicum